



「知への初々しい憧れと畏敬の念」

～子どもの学びを支える教師力・学校力の強化～

校長通信第120号 令和4年1月17日

書き初めの作品

書き初めはもともと、平安時代に宮中の一部の文人の行事（吉書初め）として始まったと言われ、吉書初めでは元旦にその年初めて汲んだ水（若水）ですった墨を使って恵方を向き詩歌を書いていました。この行事が江戸時代になると寺子屋の普及に伴い庶民にも広まっていったことが書き初めの由来とされているようです。何にせよ、墨の香りを感じながら、字を書くことは身が引き締まります。最近感じることは、書を極めることは、生き方を極めることなのではないかと深く考え始めるようになりました。子どもに教えるには、ちょっと深すぎますが・・・。

先週、校内を回り、全児童の作品を鑑賞していたところ、鑑賞をしている2年1組の児童に出会いました。3年生の作品を見て、「●●ちゃん、上手だね。」という授業中に配慮した、小さな声が聞こえてきます。私は、それを聞いて、ちょっと嬉しくなったのです。作品を鑑賞することは、相手の作品のよさを認めることです。正しく、子どものウェルビーイングにつながります。ですから、どの学年も是非とも、授業の中で見ることを大切にしてください。鑑賞の指導をよろしくお願いします。

こういった作品のよさを認めることは教師の姿勢にも表れていると思います。先日、ある先生がタコ糸を横に張って、作品の上をきちんと合わせて掲示をしていました。子どもの作品を大事にする姿勢がよく伝わりました。その先生と立ち話すると、学年主任の先生に教えてもらったとおっしゃっていました。久しくタコ糸を使って大事に掲示する教師に会っていなかった私は、本校に来て会うことができた嬉しさを噛みしめました。ちょっとしたスキルが若手に伝承されなくなっている危機感を感じているからです。ベテランの先生、どうぞ長く先生方のよき指導技術を、惜しみなく、貪欲に伝え欲しいと思います。若手の先生、特に10年間の経験のない先生は、このタコ糸掲示術を身に付けてください。そして、子どもに教え、子どもに掲示させるようにすると自主・自律の子どもが育っていきます。たかが掲示ですが、馬鹿にすることはできません！掲示で学級は変わりますから。人権教育研究協力校の教師としてのスキルを高めてほしいと思います。

